連載・青少年健全育成シリーズ　第264回

「子どもと共に育つ」

わが家には小学六年と四歳の二人の娘がいます。先日、下の四歳の娘が庭で一匹のアリを踏みつぶしていました。私自身にも子どもの頃にこのような事をした記憶はあります。とは言え、親としては伝えなければと思い「生き物を殺してはダメ。このアリのお母さんは、お家で帰ってこないこのアリのことを心配しながらご飯を作って待っているかもしれないよ。絶対にダメだよ。」と話すと、「ごめんなさい。」と泣きだしました。そして、庭に小さなお墓を作りました。娘にとって、ただのムシだったものが生きているいのちだと感じてもらえたのではと、その時はこれが正解に近い伝え方かなと考えておりました。

その数日後ですが、家の中に小さなアリが行列をつくっていました。その行列は台所の床にこぼれたクッキーまで続いており、それを見て私はすぐに近くにあった殺虫剤を手に取りました。それと共に、数日前に娘に言った「生き物を殺してはいけないよ。」という言葉を思い出しました。それでも「しかたがない。」という自分の都合に合わせた理屈で言い訳をしながら殺虫剤を吹きかけたのですが、この姿は娘には見せられない…と、心の中で苦笑いをしておりました。子どもにダメと伝えながら、同じことをしている自分に鏡を向けられたような出来事でした。

このような人の姿について、古代中国の話になりますが、白居易の話がある時、道林という禅僧を訪ね「仏教とはどんな教えか。」という問答をします。ここに出てくる「仏教」とは「正しい人の生き方」と言い換えても良いかと思いますが、「仏教とは何か。」とたずねられた道林は「悪をなさず、善をなし、心をきれいに保つこと。これが仏教だ。」と答えます。それに対し、「そんな事は三つの子供でも知っている。」と反論する白居易に向かい、道林が「三つの子供でも知っていることを八十歳の老人になっても実践できないのが人間だ。」と諭されたといわれております。「頭で分かっている、知っていること。」と「そのことを実際に行っている。」ということは違うと教えてくれる逸話です。人間の本質は今も昔もほとんど変わっていないようです。

子どもと接していていつも思うのは、子育ては親から子という一方通行ではなく、自分も子どもから育てられているということです。子どもが間違った事をした時、正しいことを伝えるのは当然大切なことだと思います。しかしそのことは同時に、自分自身を見つめる機会なのかもしれないと日々感じております。

毎月第１日曜日は「家庭の日」
毎月第３日曜日は「青少年を育む日」です。

青少年育成都留市民会議編集委員

広報「つる」広告募集！

あなたのお店の広告を広報つるに載せてみませんか？
広報「つる」は、都留市内の各家庭に配布されています（10,500部発行）ので、多くの方の目に触れます！

問合先：行政管理課　秘書広報担当

広告料金

掲載場所	印刷色	金額 / 枠	備考
裏面	カラー	20,000	２カ月掲載
内面	２色刷り	10,000	２カ月掲載

掲載月は、①1・2月②3・4月③5・6月④7・8月⑤9・10月⑥11・12月の６パターンとなります。
掲載状況につきましては、下記をご参考としてください。
また、詳細につきましては、ぜひお問い合わせください。

広　告　掲　載　欄

広　告　掲　載　欄